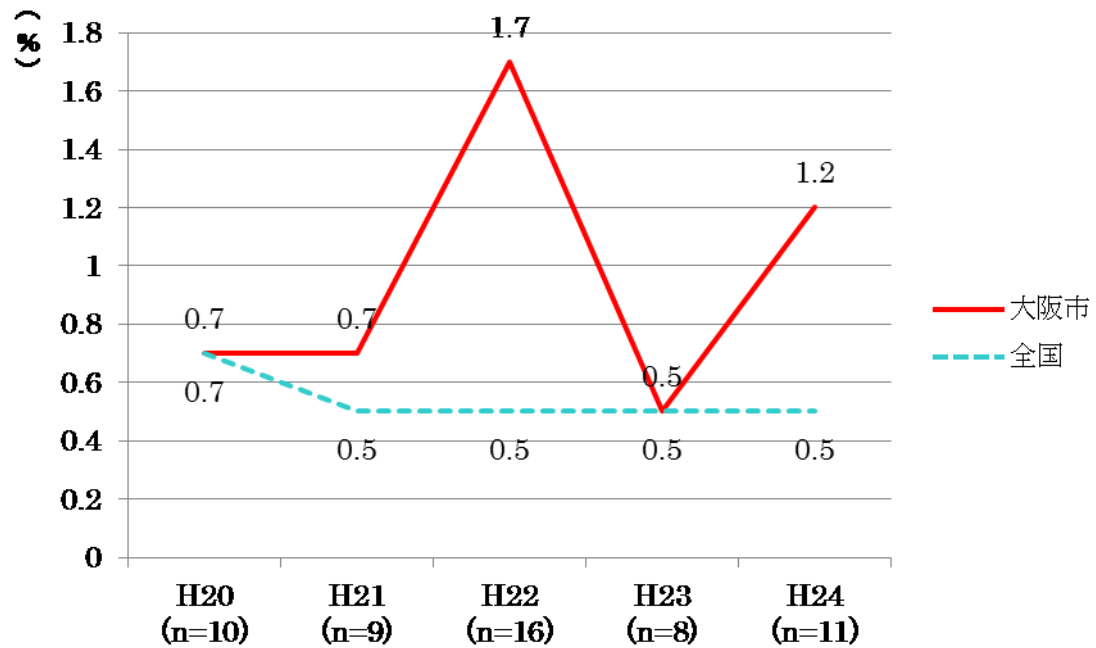
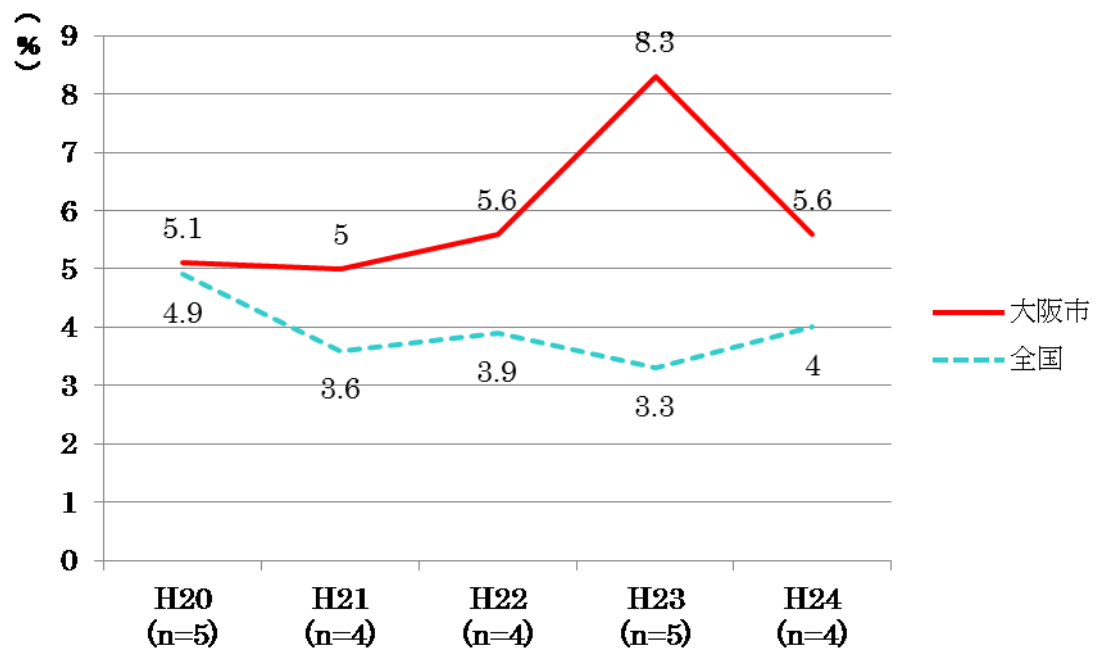


大阪市 肺結核の MDR (XDR)・再治療の状況

1. 肺結核培養陽性 MDR の推移 (薬剤感受性不明除く, 〇内は大阪市の MDR 患者数)



2. (再治療) 肺結核培養陽性 MDR の推移 (薬剤感受性不明除く, 〇内は大阪市の MDR 患者数)



3. 平成 21～25 年 肺結核培養陽性感受性判明に占める MDR と XDR（下段は%）

	初回治療	再治療	全体
MDR	27 0.8%	21 5.9%	48 1.3%
XDR	5	5	10
MDRに占めるXDRの割合	18.5%	23.8%	20.8%
肺結核培養陽性 感受性判明	3293	357	3650

（参考）

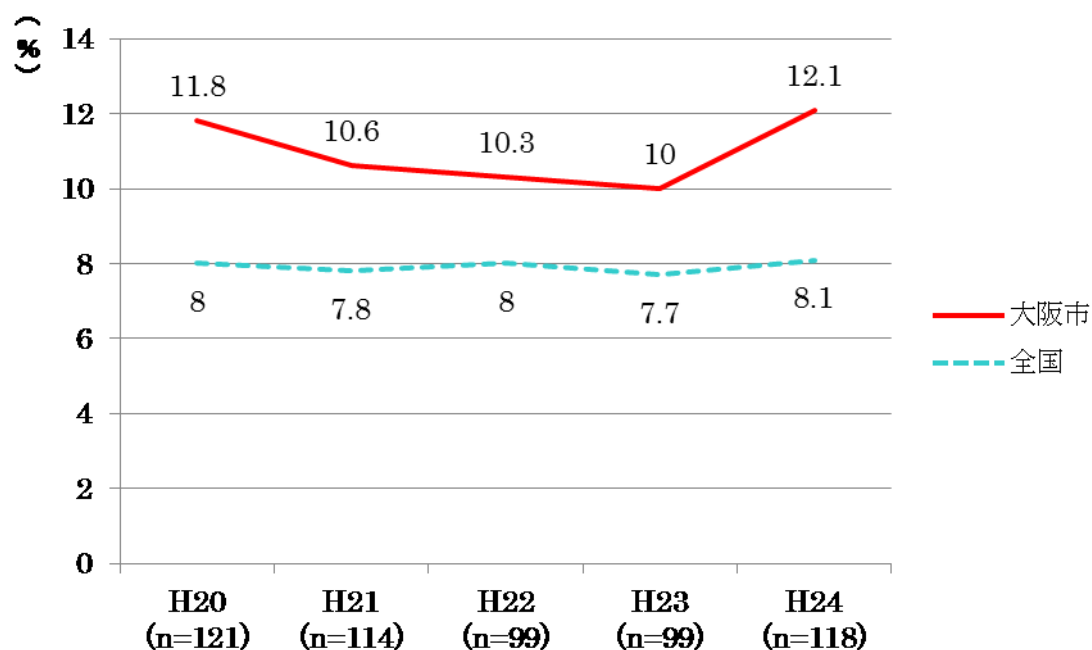
全国の MDR、XDR の頻度（結核療法研究協議会 2002 年調査）

	未治療	既治療
検査総数	2705 (100)	417 (100)
MDR(%)	10 (0.7%)	41 (9.8%)
XDR(%)	5/16 (31.8%)	12/39 (30.3%)

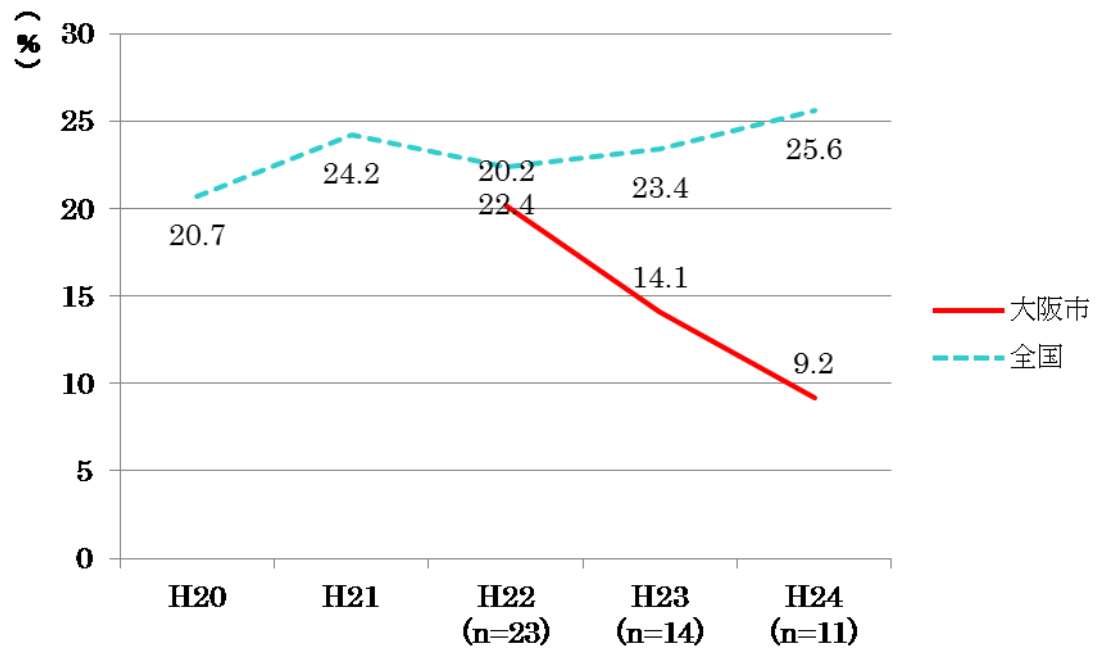
御手洗聡、私信（複十字 2007 年 5 月）より引用

XDR（超多剤耐性結核）の定義： INH・RFP・KM・LVFX のすべてに耐性を持つもの

4. 新登録肺結核における再治療割合の推移、0内は大阪市における再治療患者数



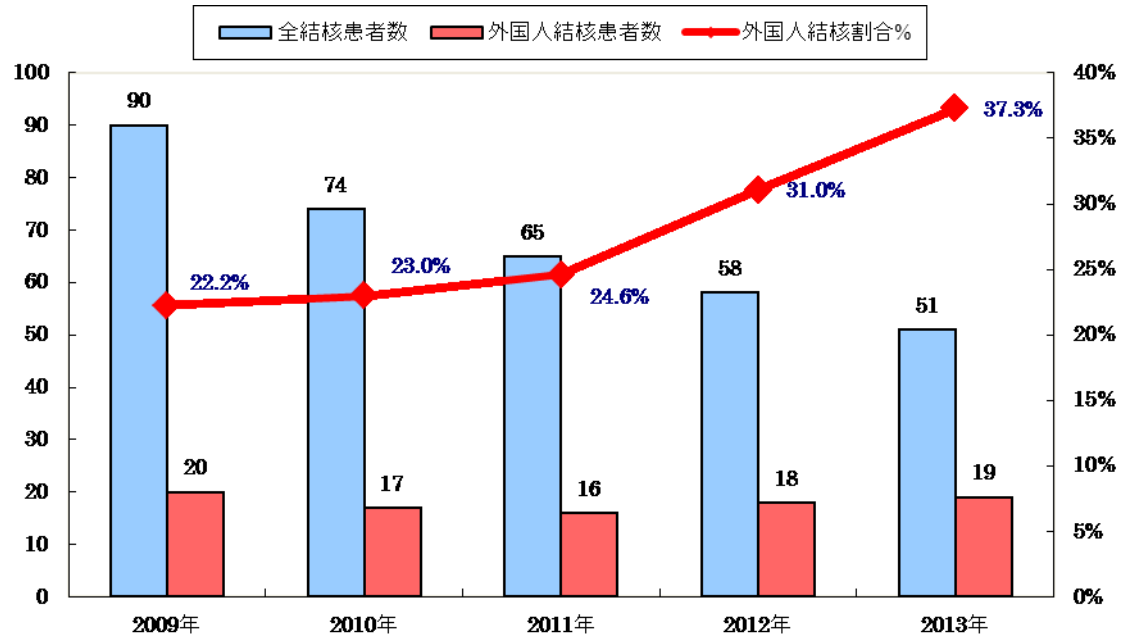
5. 再治療肺結核患者のうち2年以内の再発率、0内は大阪市の実数



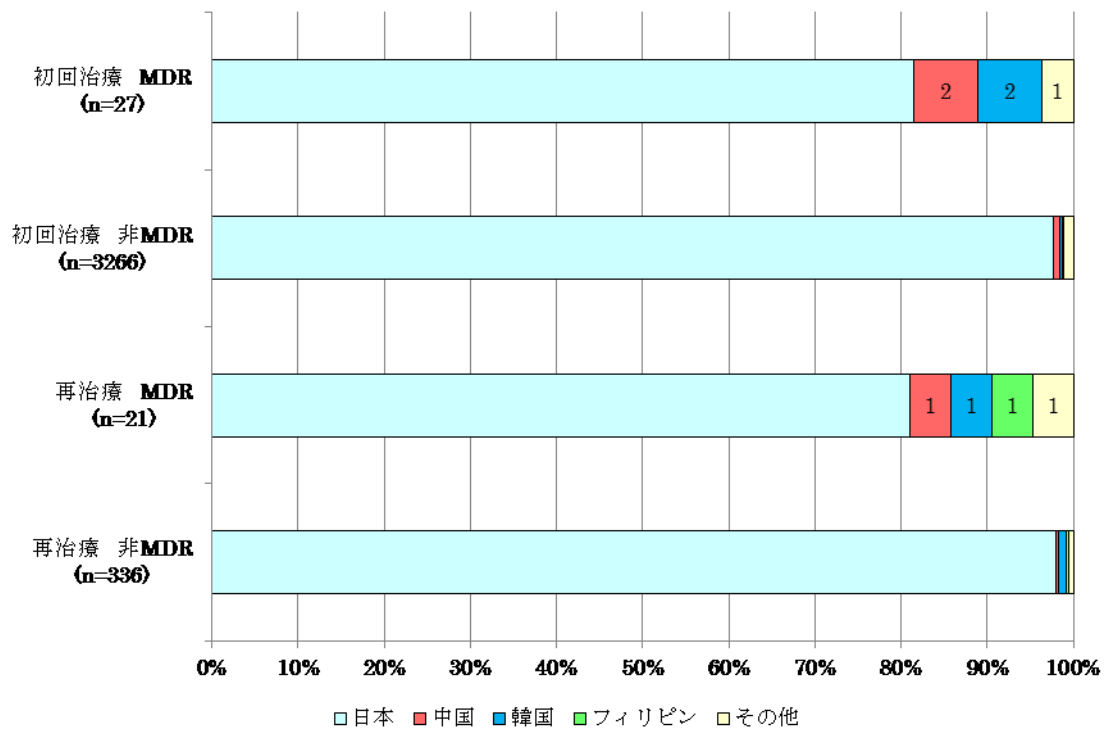
大阪市における外国人結核患者治療支援

A. 外国人結核の背景

1. 大阪市 20-29 歳結核患者に占める外国人結核患者の推移



2. 2009～13 年 大阪市における MDR と出生国



3. 20-39 歳 大阪市における肺結核患者の治療成績（2006-11 年外国人 vs 2010-11 年日本人）

（脱落中断）

外国人（n=88）	13.6%
日本人（n=176）	4.0%
転出・治療中・死亡を除く	

（転出）

外国人（n=111）	18.9%
日本人（n=190）	5.3%

B. 外国人結核患者への医療通訳派遣事業

1. 医療通訳事業概要

実施期間	2014 年 9 月 1 日～2015 年 1 月 31 日
通訳派遣回数	1 人あたり原則 3 回まで
派遣事業者	NPO 法人の医療通訳者
費用	90 分 1 万円 60 分 8 千円（交通費実費負担）
利用可能言語	英語、中国語、韓国語、フィリピン語、タイ語、ベトナム語、ポルトガル語、 スペイン語
利用場所	患者宅、薬局、勤務先、学校など

2. 電話通訳を利用したアポイントメント取得

電話通訳利用回数	特に制限なし
利用方法	各区保健福祉センターにある三者通話可能な「トリフォン」を利用
実施事業者	公益財団法人（大阪市内にある 2 法人）
費用	無料
利用可能言語	医療通訳事業と同様
医療通訳派遣日程の調整の際などに電話通訳を利用	

3. 実施手順（入院中の患者）

入院

発症届後3日以内に保健福祉センター保健師が病院訪問



① 入院中（治療2～3週間後*）に保健師と医療通訳が病院訪問



② 退院前DOTS同意面接時（1～2か月後）に保健師と医療通訳が病院訪問



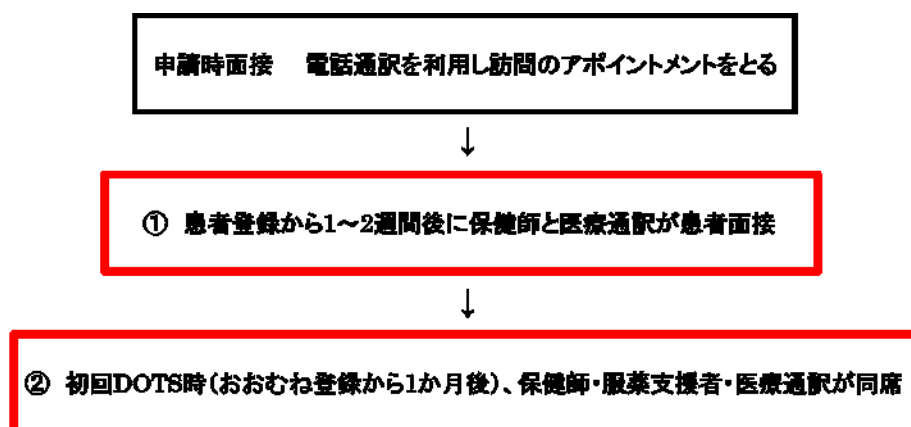
退院

保健福祉センターが電話通訳を通じて初回DOTS約束

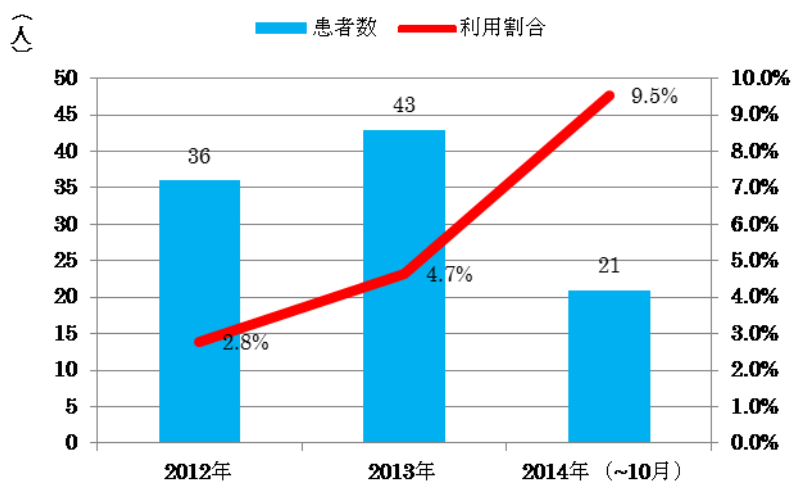


③ 初回DOTS時、保健師・服薬支援者・医療通訳が同席

4. 実施手順（外来通院中の患者）



5. 外国人結核患者数と医療通訳利用割合



6. 外国人結核患者 入国機関と言語レベル (n=21)

入国～結核登録	全くできない	日常会話可	問題なし	計
5年未満	3 37.5%	2 25.0%	3 37.5%	8 100%
5年以上 10年未満	1 33.3%	1 33.3%	1 33.3%	3 100%
10年以上		3 33.3%	6 66.7%	9 100%
不明			1 100.0%	1 100%
計	4 19.0%	6 28.6%	11 52.4%	21 100%

7. 外国人結核 電話通訳・外国語パンフレット利用状況（n=21）

	言語レベル (保健師主観)	全くできない	日常会話 レベル	問題なし	計
電話通訳	利用あり				0
	利用なし	4	6	11	21
外国語パンフ	利用あり	2	0	1	3
	利用なし	2	6	10	18

* 外国語パンフレット・・・結核研究所が作成した結核に関して各国言語で記載した説明文書

8. 今後の課題

8-1. 医療通訳導入の対象

医療通訳利用の有無・・・保健師が患者と面接し判断

日本語の理解が十分と判断しても、患者が医療用語、診断までの経過、治療の必要性などを母国語と同等に理解することは困難

言語の問題がないと判断しても医療通訳事業を利用する

8-2. 患者と個別通訳との関係

接触者健診の疫学調査の場合、個別通訳が同席していると、患者が保健師に伝えにくい内容あり

たとえ個別通訳がいても、第三者である医療通訳が同席する必要あり（必要があれば個別通訳を含めずに面談する必要あり）

C. 外国人結核患者の帰国先への紹介事業

1. 背景

これまで大阪市では、外国人結核患者の情報を帰国先に伝え、結核治療を継続するシステムを事業としては実施せず
⇒治療中断の可能性が高かった

2. 目的

大阪市で治療を開始した外国人結核患者が、帰国後も治療を継続できるような紹介システムを構築する

3. 対象

外国人結核患者のうち母国での治療を希望する旨を申し出た者
帰国を希望する場合でも・・・

日本における結核治療支援制度について説明
日本国内で治療完了することを勧める



それでも帰国の意思が変わらない者について本事業を利用

4. 紹介事業の流れ

